

茨城新聞

3/1
[火曜日]

在宅介護の事例紹介

結城市民フォーラムに600人

結城市社会福祉協議会主催の市民フォーラム「家で老いて 家で逝くには」が2月27日、結城市中央町の市民文化センター「アクリス」で開かれた。医療法人「アスミス」、県社会福祉協議会共催、同市、同市医師会、同市歯科医師会、茨城新聞社の後援。

市民フォーラムは、昨年度に続いて2度目。昨年度は在宅介護をテーマに市内の状況などを紹介。本年度は先進事例を紹介し、市民に在宅介護について知ってもらおうと企画され、会場には約600人が詰め掛けた。日本や海外の在宅介護の状況を報じたドキュメンタリー「終わりをよければすべてよし」を上演した後、シンポ

ジウムが開かれた。アスミスの太田秀樹理事長が座長となり、医療関係者、在宅福祉サービス事業者、介護者など4人のシンポジストを交え、在宅での介護問題などを話し合った。

東京・北多摩医師会の新田國夫会長は、大学病院などの急性期医療から在宅医療へ移行するシステムなどについて発表。岐阜県看護協会の野崎加世子さんは、24時間365日の訪問介護を通し、ホスピスをつくる取り組みを紹介した。千葉市の在宅障害福祉サービス事業所を管理する伊藤佳世子さんは、重度障害者の介護を通し、在宅介護の現状を語った。病状が進むと人工呼吸器が必要

な筋萎縮性側索硬化症(ALS)の患者と一緒に行き先へ旅行した事例なども示し、会場からは在宅介護についてさまざまな質問が寄せられた。

(高橋正樹)



在宅介護について意見を交換した市民フォーラム＝結城市民文化センター